

令和6年度第1回鎌倉市総合教育会議 議事録

- 1 開催日時 令和6年(2024年)6月19日(水)午後1時10分から午後2時まで
- 2 開催場所 鎌倉市役所第3分庁舎1階 講堂
- 3 出席者 松尾市長、高橋教育長、下平教育委員、朝比奈教育委員、長尾教育委員、林教育委員
- 4 関係者 共生共創部長、教育文化財部長、教育文化財部次長
- 5 事務局 共生共創部企画課長、企画課担当係長、企画課主事、
教育文化財部次長(兼教育総務課長)、教育総務課課長補佐
- 6 傍聴者 5名

【市長】本日は御多忙の中、お集まりいただきましてありがとうございます。ただ今から、令和6年度第1回鎌倉市総合教育会議を始めます。

本日は、「次期教育大綱について」を議論していきたいと考えていますので、よろしくお願いいたします。

そして、傍聴にお越しいただきました皆様、ありがとうございます。会議の傍聴につきましては、鎌倉市教育委員会傍聴規則を準用いたします。皆様の御協力をお願いします。

それでは、まず事務局からお願いします。

【事務局(企画課長)】共生共創部企画課長の安富です。中身に入る前に一点御確認をお願いいたします。

本日、朝日新聞社様から取材申し込みをいただきました。写真撮影を行いたいという御要望をいただいております。お認めすることによろしいでしょうか。

(委員了承)

ありがとうございます。

続きまして、本日の配付資料でございます。令和6年度第1回鎌倉市総合教育会議の次第にある1種類の資料となります。資料1鎌倉がめざす教育の姿(かまくら教育グランドデザイン)の検討内容についてです。

御確認をお願いいたします。

続きまして、会議の運営にあたってのお願いです。御発言に当たりましては、マイクの使用に御協力いただきますようお願いいたします。

事務局からは以上です。

【市長】それでは、次第に沿って進めたいと思います。

「次期教育大綱について」、事務局から説明をお願いします。

【事務局(企画課長)】初めに、本市の教育大綱について御説明させていただきます。

本市の教育大綱は、平成 28 年1月に第1期目の大綱を、令和2年4月から第2期目の大綱をスタートさせており、現行の大綱は令和6年度末までとなっています。

つきましては、今後、令和7年度を初年度とする新たな教育大綱の策定に向け、この総合教育会議の場におきましても、議論をお願いしてまいります。本日は議論に向けまして、教育委員会から次期教育大綱の策定に向けて御意見をいただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

【事務局(教育文化財部次長)】次期教育大綱の検討にあたり、教育委員会で検討を進めてきました「鎌倉がめざす教育の姿」の検討状況について説明いたします。

始めに、1 月に開催した総合教育会議において、教育委員会では、今回の教育大綱の見直しの機会を捉えて、「鎌倉がめざす教育の姿」について検討を行い、教育ビジョンや各種計画間の関係性を明確化し、誰にでも分かりやすい表現でまとめていく旨を報告し、当日、委員の皆様から様々な御意見を頂戴しました。

その後、教育委員会では、「鎌倉がめざす教育の姿」を「かまくら教育グランドデザイン」と称して、教育委員、校長先生、教育委員会職員と議論を重ね、また、5月 19 日開催のこどもミライミーティングでは、「10 年後の学校はどうなっていきたい?」というテーマで子どもたちと、市長、教育長との意見交換も行い、グランドデザインの検討を進めてまいりました。

こちらは、先ほど申し上げた、こどもミライミーティングの当日の様子と、子どもたちからの発言やアイデアを描いたグラフィックレコーディングになります。午前の部 13 名、午後の部8名の参加でした。子どもたちからは、「教室の場所や内容、教科を自分で選びたい」や「もっと自由に学びたい、だけど、自分に責任もある」「鎌倉の未来を創るのは僕たち」といった発言をいただきました。

こうした取組を踏まえ、本日は、グランドデザインの検討内容を御報告するとともに、次期教育大綱の策定に向け、グランドデザインを踏まえた教育委員会の考え方をお話させていただきます。

始めに、総合計画と各種計画との関係性について、改めて確認させていただきます。次期教育大綱は、令和7年4月からスタートしますが、総合計画は、その 1 年後の令和8年4月からとなっております。また、教育委員会で扱っております、教育プランと生涯学習プランについては、教育プランは、期間の定めがなく、これまでに数回時点修正をしており、また生涯学習プランは、令和8年4月改訂の予定となっています。

次に、「かまくら教育グランドデザイン」は、鎌倉市の教育に係る現状(As-Is)、鎌倉市教育委員会の教育に係るあるべき姿(To-Be)、鎌倉市教育委員会の教育に係る重点施策(Action)で構成される、鎌倉がめざす教育の姿を示したものであり、「かまくら教育プラン」「鎌倉市生涯学習プラン」及びその他、鎌倉市関連計画でそれぞれ定める方針の上位に位置付け、期間内の重点的な方向性を定めていくものと捉えています。繰り返しになりますが、かまくら教育グランドデザインの検討にあたっては、現状(As-Is)とあるべき姿(To-Be)を考え、そのギャップを課題と捉え、どうすればあるべき姿になるのか(Action)、の3つの視点で議論を行っています。

始めに As-Is について、As-Is は「現在の姿」であり、我々は、本市の教育をめぐる現状について SWOT 分析を行いました。我々の強み(Strength)については、学力調査などの結果から、「学力が高い」「基本的な生活習慣や学習習慣が定着している」「自己肯定感が高く、表現するのが好きで得意」「いわゆる非認知能力の多くが高い傾向」といったことが挙げられ、これらの強みを生かして、今後めざす方向性としては「個別最適で協働的な学び」、「学習者中心の学び」を掲げました。

次に、弱み(Weakness)については、「不登校児童生徒や発達支援が必要な子どもの増加」や「教職員の働き

がいの向上、教員のなり手確保」「学校と社会の連携、教育観・授業のアップデート」「校務デジタル化に課題」といったことが挙げられ、今後めざす方向性としては、「多様な学びの場づくり、探究的な学び」、という「ワクワクしながら未来を創る学び」を掲げました。

機会 (Opportunity) については、「自然・文化・伝統などの地域資本がある」「多様で元気で個性的な大人たちがいる」「家庭の社会関係資本、文化関係資本が高い」「共生社会、スマートシティ、ファブシティに取り組むまちである」ことが挙げられ、今後めざす方向性としては、「社会や地域資源を活かしきる」という「地域の宝物を活かした豊かな学び」を掲げました。

最後に、恐れ (Threat) については、「家庭や地域が抱える問題の複雑化」や「子どもを取り巻く状況の深刻化 (ヤングケアラー、経済格差など)」が挙げられ、今後めざす方向性としては、「子どもの背景や、構造的な問題に対処する」という「共生社会における自分らしい学び」を掲げました。

また、「As-Is」(現在の姿)を客観的に示すものとして、SWOT 分析のそれぞれの方向性に関連するデータを、「鎌倉にまつわる教育データ集」として作成中です。

例えば、「全国学力・学習状況調査」の教科別の平均値を全国、県平均と比較すると、本市の子どもの学力は、全国・県と同程度から高い傾向にあること、特に中学校では英・数・国いずれも全国・県の平均を上回っていることが分かり、SWOT 分析の「強み」を示すデータとなります。こちらは完成次第、改めてお示しさせていただきます。

続いて、To-Be (あるべき姿) についてです。グランドデザインがめざすものとして、教育委員会における議論の中で出てきたキーワードなどを参考に、どう実現したいのかのあるべき姿「ビジョン」、我々の使命、やるべきこと「ミッション」、それを受けた考え方の基準「バリュー」の VMV(MVV)として整理しました。

鎌倉市全体のビジョンは、「世界に誇れる持続可能なまち」、ミッションは「共生社会を共創する」と掲げている中で、鎌倉市の教育のビジョン (あるべき姿) は、「炭火のように生涯にわたって主体的に学び続け、個人と社会のウェルビーイングを実現する」ことであり、ミッションについては、先ほどの SWOT 分析で導いた4つの重点的方向性、①～④を掲げました。

ビジョンやミッションを実現するための考え方の基準であるバリューについては、鎌倉市全体は、“多様性を尊重し、複雑な社会を理解する努力を継続し、鎌倉を愛する先人たちが守ってきた歴史、文化、自然、共生の価値観を大事にすることと捉えています”と捉えていますが、教育については、“全ての子どもたちがワクワクしながら学べる魅力的な学校教育を目指していくと共に、家庭・学校・地域の連携を促進し、次世代を担う子どもたちの心を育み、世界に誇る歴史的遺産と豊かな自然を活用しながら多様な学習機会を大事にしていく”ことであると考えています。改めて、かまくら教育グランドデザインのスローガンは、「炭火」のように生涯にわたって主体的に学び続けることです。

しかしながら、炭火になる前に、学びたいと思う気持ちを作らなければ火がつかみませんので、“子どもの心に火を灯す”“があったうえでの「炭火」と捉えています。

今一度、グランドデザインを整理すると、ビジョンである、「炭火のように・・・」に向けて、「4つの重点的方向性」を柱として位置付けています。また、これらの柱を支える基盤として、心身の健康、デジタル、安全安心な施設などが必要であるとしています。柱ごとの具体的なアクションは、現状の施策を掲げています。次期大綱の期間中に取り組むアクションについては、次回の総合教育会議で議論していきたいと考えています。

最後に、4つの重点的方向性の対象者についてですが、それぞれ対象者に濃淡はありますが、幼児から大人まで、幅広く対象者を捉えています。

以上が、教育委員会で検討を重ねてきたかまくら教育グランドデザインの概要です。

なお、教育委員会としましては、お示したグランドデザインが教育大綱で定める内容と重なるものであると考

えております。引き続き、教育長から補足説明いただきます。よろしくお願いいたします。

【教育長】今、教育委員会の方で議論中の内容を御報告させていただきました。先ほど来出てきた炭火とかわくわくとか、学習者中心とか、地域の宝ですとか、共生とかこういったキーワードがあります。これは市のミッション、ビジョン、バリューとも軌を一にするものですし、子どもたち含め様々なレイヤーで議論を重ねてきて出てきたキーワードを少し並べてみました。今日は具体の施策というところまでのアクションは、踏み込めないかなとは思いますが、それでも大きい柱立てとか、基本的な方向性というところについては、議論を踏まえて修正をして、なるべく固めていきたいなと思っているので、ぜひ今日は、委員の先生方に、そういった観点から、また御意見などいただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

【市長】それでは、ただいまの説明につきまして、御意見御質問というのもあれなんですけど、少しざっくばらんな議論をしていければと思います。よろしくお願いいたします。

【朝比奈委員】炭火という、考え方について一言。私はお寺にいて、炭を使うこと特に若い時に修行道場におりました時は、炊事は薪や炭を使っていて、暖房なんかないから囲炉裏に炭が入っていて、炭はもう当たり前のように使っていた立場から、ちょっとお話をさせていただくと、あくまでも炭というと、多分一般的には皆さんホームセンターでバーベキューの炭と見えてバーベキューグリルに放り込んで着火剤をかけて、チャッカマンで火をつけてるという仕組みを御想像される方が多いと思うんですが、そういうことではなく、もう丁寧に起こした火を次の炭火に繋ぐため、大切に残っていて、具体的に言うとう修行道場では、かまどで薪で炊事をして、そこで燃え尽きさせることがないように丁寧に薪が炭化したものを、消壺に炭として残して、それを七輪のようなもので、また火をつけて使う、その起こした火を囲炉裏に移して、そこにある積んだ炭に合わせて火が起きるわけなんですけど、その炭は炭を足していくと元の火が移って、カンカンと起きてくるわけだけれども、夜は危ないから灰に埋めて、休むわけですが、しかしそれはある程度の量が起きていたものに灰をかぶせれば、一晩ぐらいで消えてなくなるわけではなくて、やはり少しだけ熾火が残っていて、そこにまた朝起きたら丁寧に組んだ炭に移して、またそれがだんだんもっと広がっていくと途切れることがなく、小さな熾火がどんどん次に伝わっていくというようなことがまさにその生涯にわたって主体的に学び続けるというイメージで、教育長がおっしゃったんだなと思っています。もう一つ、私のイメージとしてあるのは、鎌倉にいらっしゃるアウトドアの専門家の方で寒川一さんという方がいらっしゃるんですね。この方が、焚火をなさるときは、まず、焚火の現場に行って、例えばうちの境内でもなさったんだけど、小さな小枝とかもう5段階ぐらいに燃やすものを集めて、小さなところから火を起こしていく。それもあえてマッチを使わないで、いろんなことなさるんだけど、順番に火を足していって最終的に対面の薪が燃えて暖を取るのだけれども、でもそれはキャンプのときの焚き火は火がたくさん燃え上がっている状態をイメージされと思いますが、彼の焚き火はそうではなくて全部火が燃え盛る火が収まって、やはり炭になった真っ赤なカンカンと起きたその炭が、そこからが焚火である。それをずっと楽しんで最終的には、消すんだけど、ばあっと水かけて消すのではなくて、もう丁寧にそれを燃え切らせていって、最後、灰にして安全なものをまたその土地に返すというような作法があるんですが、あの焚き火を見るとやはりこの概念に近い丁寧に炭の使い方だから決して思いつきでおっしゃったのではなくて、まさに状況はこのイメージに近いなというふうに思っています。ちょっと冒頭ですが、前提としてこういうことなんじゃないかなということを申し上げたくてお話しさせていただきました。

【市長】ありがとうございます。私は全くホームセンターのことを思い描いてましたから、認識を改めさせていただきたいと思いますが、そんな深い意味があるんですね。やはり丁寧に丁寧に、大切にしていくということが大事なんですね。

【下平委員】今おっしゃった通りですが、小学生のお子さんだと炭火に触れるチャンスがない方も多いのではないかと思います。もし「炭火」を活用するのなら、説明が重要ではないでしょうか。炭火は温かくてやわらかい。それと主体的に燃え続け、次に繋がっていく。そういうニュアンスが背景として大事になると思うので、そのあたりをうまく伝えられれば、「炭火」がキーワードとして生きますよね。一言で言い表そうとすると、この「炭火」の深さを伝えるににくいので、そこに工夫が必要かと思います。

それから、あえて「子どもの心に火を灯す」となっているのですが、教育大綱は子どもだけが対象ではないので、心に火を灯すのはどの段階でも遅くはない。ですから、その点も工夫したいです。私自身も小・中学校の先生の教えだけでなく、社会人になってからの上司・お客様の言葉などによっても成長し支えられ生き続けていると感じるので、導き合い学び合えるお互いになりたいし、それを受け継げることも大事にしたいですね。

【林委員】今おっしゃったような文章ですが、大学で論作文指導をしているせいか、気になるのですが、子どもの心に火を灯すのは誰で、炭火のように学び続けるのは誰というように主語と述語を考えると、ちょっとずれているようにも読み取れるので学び続ける主体が子どもであるならば、上にある「子どもの心に火を灯す」という文章は子どもを主語にした「Do」にできないのかなと思います。また、欲張って、あの「火を灯す相手」にも訴えたいのならば、そこは主語を変える工夫が必要かなと思います。そうするともっとこの炭火の意味が伝わるかなと思っているところです。ぱっと出てきませんが、下の文章は何かそのまま使いたいと思いますが、上のところの工夫は、必要かなと思いました。

【長尾委員】炭火のところでこのキーワードが出てからしばらく時間が経ったかなと思っておりませんが、教育委員の中でも今日ほど腹落ちした日がないんじゃないかなと思っております。みんなでこの炭火という捉え方をどうしようか、先ほどのような背景だったりとか主語の話だったりとか、炭火というキーワードがグランドデザインにマッチするのではないかなと、みんなそんな気持ちかなと思っております。その中で炭を起こすときのやはり難しさ、着火剤がありませんので非常に起こすためには技術や判断力が必要だということ、そこを表現することとともに自分で自ら火をつけるといったその実践のところまで表現できたということなので、このキーワードをもとに先ほどのその文章のところを一考することが必要だと思うことと、あとはお写真の再考をしていただけると、あと市民の皆様へのメッセージとしてもいいんじゃないかなと思います。

【下平委員】心に火を灯すというところは、やはり家庭教育、生まれてすぐからの教育も大事な部分だと思います。生まれたときは、みんなそれぞれに才能の種や好奇心を持って生まれてきている。だからそれを地域や家庭環境で潰したくないなという思いがあります。この教育大綱とは教育委員会だけではなく全ての市長部局に行き渡る考え方なので、学校現場だけの問題として捉えず、広い視野から「みんなが豊かな火を灯し、それを持続できる」そんなまちであれば、教育であればいいなと願います。

【教育長】会議で感激することってあんまりないんですけど、感動しながら聞いておりまして、本当にありがとうございます。

います。まず炭火というキーワードについて、非常に説明が必要な言葉なんだろうなということは改めて私も先生方の議論を聞いて思いました。大きくは二つの要素があると思っていて、一つは朝比奈委員からあったようにじわーっと燃え続けるという、灰をかぶせても次の日も使えるほどに温まっている修行道場の炭。こういったものは、我々が求めるイメージそのものなのかなと思って、鎌倉らしいメッセージなんだろうなと思ってます。なので、テストがあるからとか親に怒られるかもしれないからとか学校を卒業したら学ばなくてもいいのかとか、そういうことではなくて自分の中にあるワクワクというものを、火のように炭火のように灯し続ける、じわーっと長く持ち続けるようなイメージをこの炭火に込めたというところが一つの要素。それから委員の先生方からあったもう一つの重要な要素は、やはりこの火を灯す部分。ここは巧みな仕掛け、ある意味、高度な専門性っていうのが我々、教育関係者の方に求められる。もちろん内発的に火を灯し続けるわけですが、内発的な火を灯すための外発は、これも逆説的なんですけども、必要であって、どうやったら子どもたちがワクワクし続けられるのか、自発的に学んで学びを掴み取ろうとしていくのかというのは、その環境設定だったり、教材であったりその仕掛けというのは本当に巧妙でなければ火がつかない。そこは我々プロダクト側が巧みな仕掛けをいかに行えるかで個別最適な学びだとか、主体で深い学びが、子どもたちの中で起こるためにはどうしたらいいのかというのは、まさに心に火を灯すということだと思ってます。この言葉は、林委員や長尾委員からもあったように文章や写真などは少し我々も磨きたいと思っています。先ほど林委員とも話したんですけど、先日、退職校長会で飯尾会長がおっしゃってたのがウィリアム・アーサー・ウォードというアメリカの教育学者のセリフを取って、いくつかあるんですけども、普通の先生は喋るとか、いい先生はやって見せようとするとかそういういくつかのワードが並んで、最後にザグレートティーチャー偉大な先生というのはどうなんだというインスパイアです。要すれば心に火を灯すようなのが教師であるということを御紹介されていて、私も感激した次第です。なので、そういった子どもたちの中にあるものを先生方が引き出そうとするという教育が校長会の先生方はもちろんですけども、そういう考えが脈々と先生たちの中にあるって、そこは本当に鎌倉のいいものとして残していかなければならない。そして下平委員からもあったように、それは学校教育だけの話ではもちろんなくて、教育大綱は、当然市長と教育委員会とも同じ目線を合わせる一つのグランドデザインですし、学校教育だけではなくて生涯学習や文化、文化財も含むものであって、その視点というのはより重視してやっていく必要があるんだなと私の方も認識したので、ますますこの炭火というキーワードは生かしつつも、この見せ方とか説明の仕方というのは工夫していくということでやっていきたいなというように思いました。

【市長】お聞きしてて、思い出したのですが、上杉鷹山の言葉で、この炭火を絶やさずにリーダーが燃え続ければ、その周りにその熱をじわっと広げていくことができるという話をして、まちの人たちを奮い立たせるという話があるんですけど、そういう意味でいうとその仲間同士で温め合えるというか、熱を伝えて一緒になって炭火を燃やし続けるということもあるのかなと思いました。教える生徒と先生の関係と、この横の生徒同士の関係でも、炭火というのは結構あるのかなともちょっと感じましたね。

説明と、その背景と、今皆さんに御披露いただいたようなところをちゃんと伝えるようにしていく言葉を作る必要がありますね。

【長尾委員】最初に炭火を聞いたときに、三者三様の捉え方があって、私達もバランス、どんな解釈をすればいいのか少し前段で会話をしていくみたいにしてるんですけど、少しそういう作業が非常に必要になる可能性もあるわけなので、わかりやすい言葉ではないかもしれないんですが、奥深く、何かものを感じるというか、そんな言葉に育てていければいいと思う。あとは、少しテクニック面でお写真などもあるのかもしれませんが、何かそうい

った示し方というのは、今いろんな素材を使うやり方もあります。そのところが工夫できれば、なので私、初めて聞いた日よりも、どんどんこの炭火の炭火という言葉が出てくることに違和感がなくなったり、世界観の深さと広さを実感していますので、非常に子どもの強みなんじゃないかとは思っています。あとは、文章的なところも背景等できればと思っています。

【林委員】これというのはないですが、やはり心に火を灯すのは、まずは家庭であれば保護者、学校であれば教師教職員、そして最後には自分自身であるというところがあって、それを一つの言葉にまとめて、今あるような2段に書くよりも、何か分けて、例えば、あの写真が変わったとしても、結局、グランドデザインの下に灯す方があって、下に学び続けるというような、書き方もあるかなと思います。この心に火を灯すというのがとても広くて深くて大事で、そのために「炭火」という言葉を考えたのだなと思いました。先生方、特に若い先生方々が、「ん？」ってならないように各学校で炭火を作っていく過程を体験していただかないと、先生方にもなかなかわからない時代に入ってきています。私の年齢だとイメージがあって、昔のこたつには何か入っていたではなくて炭が入っていたよねと、ピタッとくる話です。これからの未来社会、未来の学校をつくる先生方に伝わるような方法を知っている者が伝え方を考えなければならぬですね。考えましょう。

【下平委員】前にも意見交換しましたが、キャッチコピーのようなものにするのかどうかは別に取り決めはないわけで、具体的にはそれをどの程度まで表紙に記すかという点があると思うのです。例えばキャッチコピーを「炭火」として、基本目標の中に今のように、心にお互い火を灯し合ひましょう、それから、消えることなく生涯燃え続ける、などを記す。そういう方法もあるでしょうし、記し方に関しても今後、話し合わなければと思います。

【市長】そうですね、やはり工夫が必要だということの御意見ですので、しっかりと実行して、進めていければと思います。よろしくお願いします。他の話題はいかがでしょうか。

【下平委員】先ほど資料の中にありましたが、教育大綱と他のプラン・計画などの兼ね合いが良いタイミングだなと思うんですね。7年に新しい計画になって、8年に総合計画が出来上がり、そこから新プランが立ち上がる。最初の教育大綱の作成の時から、大綱は冠としてあるだけじゃなく、市の様々な施策が、そこから派生し繋がっていくのが理想だと考えていましたし、今回もそのことを最初の話し合いから主張してきています。繋がりができるともいいタイミングだなと思います。それと改めてこれを見て感じるのですが、令和2年度に作った教育大綱は「未来を拓け、共に育つ鎌倉」というキャッチコピーでした。これは、ちょうど当時「共生」とか「共に育つ共育」とか、社会で耳にするようになった頃で、先取りする思いでこれを決めました。先ほどの as is の、現状の資料を見ますと、共生社会における自分らしい学びという項目のアクションがとても多い。それを見ると改めて、教育委員会だけでなく、各市長部局も「共生」という問題に向けて動いてきた結果がこれだけの実践に繋がっていると思うのです。そう考えると、実現していく施策を動かしていくための要になる重要な大綱だと思うのです。現状ちょっとアクションが足りてない、できてないところに動きが起こせるように予算もかけられるようにしていきたいなっていう思いがあり、学習者中心の学びや未来に繋がるわくわくしたもの、そういうアクションが実際動き出すところに焦点が当たる話し合いをしたいです。具体的に目標を定め、鎌倉のこの大綱を実現するアクションに予算をかけたいですね。そのためには、優先順位の検討もが必要なんじゃないでしょうか。

【林委員】私もこれ拝見したときに共生社会のところにアクションがたくさん出てきて、学校もいろいろやっているのだろうけれども、ちょっとこれからなのかな、ここから頑張らないといけないところなのかなという印象と感想を持ちました。一番最初に子どもたちと未来の学校について議論という非常に良い内容が出てきて、見させていただきましたが、古い時代から学校におりますが、「やってるよやってたよ」というのが結構いっぱい入っています。ただ、昔は予算もないので、伝手とか保護者とか、とにかく走り回って色々な方をお願いして授業をしたり教室の場所や授業・教科の内容を自分で選べるという実践もいろいろやってきたりしました。そして、昔も今も子どもたちは変わらないと思いました。そこはもう今、予算をかけてやれるという流れが実際にできてきているので、ぜひ学習者中心の学びのところはこれから高い優先順位としてやっていきたいなと、私も今思っているところです。昔は地域との繋がりがとても多かったので、皆さん汗水たらしてくださいましたが、やはり教育費として確保してやっていった方が望みが叶うのではないかなと思います。

【市長】ありがとうございます。ミライミーティングを教育長とさせていただいて、やはり子どもたちは、いろいろ自由な発想をして、結構年代もバラバラだったので、その表現の仕方は幼かったりもするんですけど、やはり自分たちで決めたいとか、自分たちの学びをもっと、楽しくワクワクするものにしたいという思いが一樣にエネルギーとしてあって、何かそれを感じた会だなと思ったんですけど、裏を返せば、今なかなか学校現場がそうになってないというところがあるんだろうなと感じましたし、でもそうならない理由もあって、やはり林委員おっしゃっていただいたように、それ本当にどうやるのかというときにはやはり人も時間もお金もかかる話だということはどうしていくかということ、今、投げかけをいただいたんだろうなというように思います。そういう意味では、目指すべき方向はまさにいっても、こういう方向だというように思いますから、あとはどのようにそこを丁寧に一人一人の児童生徒の興味関心にしっかりと支えて応援して、花開かせてということが丁寧にできるような体制作りというのは、ぜひ市長部局としても応援したいという思いがありますから、より予算という優先順位を高く持っていきたいという思いではありますから、その辺を色濃く出した教育大綱にやはりしていきたいなと思います。

【長尾委員】少しずれてしまったら申し訳ないんですが、今の話、本当に人と時間とお金を子どもたちが目指す姿に持っていくためにどうしているのかということにも注力しますので、やはりその予算みたいな話が非常にキーワードになってくるかなと思うんですが、先日、議会等で給食費無償化とかですね、それを踏まえて文科省から今、全国に3割ぐらいそういった動きがあるみたいな報道もありまして、それを少し頼みの中で、鎌倉の中でもそういう声が少なくともあるんだなってことは認識をしつつ個人的には本当に優先順位だなと思っておりまして、こういったところを実現するためには、どういう順番でやっていくべきかと、これは非常に議論も丁寧に慎重にやっていくべきなんだろうなと、今の話を聞きながら改めて思った次第です。

【下平委員】鎌倉ならではの教育を目指すために、この as is 現状の弱みを補強し、そして恐れに備えるということが大事だと思います。全国的にどうだからということに流されることなく、そこにお金も時間もかけたいです。力がある鎌倉市をつくるためにも、そういうところに特化し、しっかりと予算をかけられる方策を考えていきたいです。

【教育長】いろいろ施策の方向性についても非常に議論いただきまして優先度というところがありました。やはり本当にこれが一番のグランドデザインなので総合的に考えていかなければならないと思うんです。長尾委員から給食費無償化の話も出ましたが、こちらについては今、給食費無償化をどうするかというのは一つ大きい issue で、

我々も研究しているという状況であります。給食無償化というところのみを考えてはやはりいけないと思っていて、やはり子どもの教育費あるいは家庭の教育費全体というのはどういう構造になっているのかというところで捉えないといけないなと思っております。当然、放課後の学びもありますし、塾であったりランドセルであったり様々な学習費、教育費というのがあって、そこを総合的に考える必要がある。それは教育機会の均等であったり、確保という観点、目線だと思います。さらに言うとその外側には当然、委員から御指摘の教育の質を向上させていく鎌倉の教育を強いものにしていくんだというようなお話もいただきました。そういった視点がまた大事なものであって、そこをやはり全体像でやはり見ていく必要があるなど。この何か一つの施策についてイエス or ノーっていうことで考えるのではなくて、リソースも限られているわけでありまして。その中でどういう配分をし、鎌倉の子どもたち自身に学びをつかみ取っていくような学びにしていけるかというのが我々問われているんだと思います。先ほど市長からあったようにこどもミライミーティングということで、市長にもお越しいただいて小学校低学年の子どもたちなんかかなりわざわざわちゃわちゃの場になったんですけれども、市長もそういった子どもたちに向き合ってくださいって話を聞いてくださいました。まさに子どもたち自身が、学びをつかみ取りたいというような話もだんだん議論が深まってそういうことも言ってくれるようになりました。今のこどもまんなか社会ということで、子どもの意見聴取というふうなことも言われたりしていますが、聞いて終わりとか、あるいは子どもの言いなりになるというか、それはもうどちらでもやはり場じゃないと思っていて、子どもの意見をももちろん尊重しながらこの子どもたちが本当に炭火のような存在になるためにどういった支援であったり環境だったり問いかけだったり、あるいは待つとか促すとか様々なアプローチの仕方があって、これを我々として探究し続ける探究する教育委員会であるというふうなことが必要なんだと思っていて、それはその高度な仕事ではあるんですけれども、そういったものを我々としては突き詰めていきたいなとそれがこの炭火の火をつける方ですね、繋がっていくものだと思うので、少しその辺を言語化はしっかりさせていただきたいなと思いました。議論が遡って恐縮なんですけれども、共生というか、共育というか、共に生きるというのが、この前の教育大綱のキーワードとしてあって、これは当然市全体の共生社会共創というビジョン、ミッションに紐づいてもありますし今回も共生社会における自分らしく学びに行きついている部分ではあります。そして、先ほど市長からまた炭と、朝比奈委員からもあったように炭が広がっていくという火を広げる役割があるということは、これすごい大事なじわ一つと燃え続ける、第1の視点と火をつける巧妙さという第2の視点と、この共に生きるというか広がりを見ていくという視点、第3の視点をいただいたなと思っております。やはり多様性の時代とか多様性ということが語られると、これもややもすると先ほどの子どもたちの話ではないですけど、これもちょっと誤解を恐れずに言うと、あなたと私は違うから、もう話さなくていいとか仕方ないよねとそれも多様性だからって言って終わりっていうふうになってしまったらこれはやはり教育、共に生きるには、やはりなかなかかならないということだと思ってます。教育の現場であったり学校というのは共生社会における流儀を学ぶような場でもありますし、対話であったり会話・コミュニケーションというのは欠かせないってということなんだとそこの広がりを帯びていくというところをいかにで、炭火にも込めますし、引き続きこのグランドデザインですね、引き継いでいけるか、やはり共生社会をめざすのであれば、わかり合えないかもしれないけれども対話を諦めないとか、そしてお互いにその自由を侵害しないようなお互いの自由を尊重しながら存在を尊重しながら生きていけるような生き方とのはどういうことができるだろうかとか、諦めずに考え続けるという姿勢というのは、学校の中で学んでいきたい。そこは本当に共生社会という鎌倉を目指すところに近づいていくということだと思うので、それはまさに子どもたちとの対話もそうですし、市長自らが子どもたちのそういった声も聞いていただいているわけなのでそういったところから、私も一つのヒントにしながら少し言葉を、整備あるいはさらにこれから施策もですね、しっかり全体像を考える中で、込めていきたいなと思っております。

【朝比奈委員】炭火を付け加えるんだけど、火がね、移って行って広がっていくっていう考え方もそうですが、炭の火というのは、炎に上げられるんじゃないのに、赤赤とした熱がじんわりと科学的に遠赤外線なんでしょうけど、効果的に内部まで伝わってくる。その効き目が違うんだよね、その辺の考え方も加えていただいていいんじゃないかなと思います。

【林委員】ちょっと細かいところで、私だけの違和感かもしれないですが、こどもミライミーティングの3つのまとめの言葉で、1つ目の「教室の場所や内容、教科を、自分で選びたい」のところに「教科」という言葉がどうしても実践してきた私には引っかかります。子どもたちのミーティングなので、子どもは「教科」という言葉を使うかなと思います。これからの授業は教科担任制もありますが、いくつかの教科が単元の中で共通の題材を扱うという授業もあるので「教科を選ぶ」という言葉が引っかかってしまいます。もう一つは、大綱では大前提のことなので、書かれてないのだと思うのですが、今話している全てのことは、子どもの安心安全が確保されることが大前提だと思います。

私は、震災のときに校長として子どもを預かっていました。子どもを校庭に集めたのはよかったのですが、2回目の余震で地面が揺れて、これで地面が割れたらどうしようと、本当に怖かったです。私が初任の辞令交付式のときの教育長の第一声は、「あなたたちは子どもの命を預かっています。」でした。ですから、大綱に入れる入れないは別として、基本はそういう部分での「守る」という施設の問題とか、議会でも体育館の避難所のことも出ていましたので、そこはもう忘れてはならない、切り離してはならない課題、生涯続く課題ではないかなと思います。先日、23年前の6月8日の不審者侵入池田小事件のことが新聞にも出ていました。やはり不審者が入ってきた場合についてもちょっと甘くなっているかなと感じられる時代になってきたので、もう一度「命を守る」というところも片隅に置いて進めていただけたらかなと思います。

【市長】最後の林委員のお話もやはり学校の今、老朽化を含めた対応はですね、しっかりと予算をつけていかなければならないポイントでございますので、子どもたちの安全安心をしっかりと守っていくという視点からも大変重要なポイントですから、その辺りをもう少し工夫して表現できればと思います。

では、よろしいですか、皆さんから御意見いただきましたけれども、教育委員会から説明がありました鎌倉がめざす教育の姿を、これは次期教育大綱としていくたたき台、素案ということで、引き続きこれを基に進めていくということでよろしいでしょうか。

（ 委員了承 ）

【市長】ありがとうございます。ではそのように進めさせていただきます。

【事務局(企画課長)】今いろいろ御意見いただきました。教育グランドデザインそれから教育大綱にいただいた御意見を踏まえまして、引き続き事務局でも検討しまして、また皆様と意見交換させていただきたいと思います。

【市長】では、他によろしいでしょうか。

これもちまして令和6年度第1回目の鎌倉市総合教育会議を閉会いたします。ありがとうございました。